



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内田百閒の研究 [全文の要約]
Author(s)	山田, 桃子
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7057号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72213
Type	doctoral thesis
File Information	Momoko_Yamada_summary.pdf



博士論文要約

博士論文題目

内田百閒の研究

山田桃子

本論文は、作家・内田百閒（一八八九―一九七二）について、そのテキストをめぐる歴史的な問題を重層的に論じることを試みたものである。まず、本論文の問題関心と研究の方法について述べる。

一定の認知度に比べ、先行研究はけして多いとは言えないが、その理由を集約してしまえば、この作家によって書かれたものに明確な「思想」が見出せず、歴史的な位置付けが困難であるという一点に尽きるだろう。だが、テキストはけして歴史と無関係に自足しているわけではない。そのため、本論文は主に二つの観点から、百閒のテキストをめぐる歴史的な問題を論じている。一つは評価史を立ち上げる観点であり、百閒のテキストが同時代から今日に至るまでのような歴史的文脈の中にあり、どう評価を受けて来たかという歴史を詳細に位置付けている。これに対してもう一つは具体的なテキストを読解する観点であり、主に戦前期のテキストを同時代の文脈との関係から論じている。こうした読解を通じて本論文は、百閒のテキストにおいて歴史的な時間性、特にイメージをめぐる過去と現在の錯綜した時間性が問題となっていることに注目し、それが戦前期の文脈とどう批評的に関係するのかを明らかにしようとしている。

また本論文は、こうした議論の中で、百閒のテキストの代名詞とも言える「随筆」をめぐる問題についても追究している。そこには同時代評価の詳細な整理という目的だけでなく、先行研究から距離をとり、現在の「随筆」をめぐる認識を出来る限り相対化しながら百閒の「随筆」について考えるという目的もある。またそれにより、「随筆」、「幻想文学」と分けて考えられてきたテキストを、いずれも錯綜した歴史性と切り結んだ、百閒のテキストの特異な問題系を示すものとして論じることが可能になると考え、検討を行っている。

以下では、本論文の構成と各章の要旨について述べる。

本論文は全体を、第一部「内田百閒評価史の検討」、第二部「メディア・テクノロジーの経験をめぐる――一九二〇年代の百閒作品に関する問題」、第三部「断片・歴史・亡霊――一九三〇年代以降の百閒作品に関する問題」の全三部（全一〇章）で構成しており、その前後に序論・結論を付している。

序論では、本論文の問題設定を詳しく述べている。テキストを読解する際の本論文の問題設定は、関東大震災以後の東京の「帝都」として

の変容、またそれと連係した「帝國的な広がり」と百間のテキストとの関連を見出した丸川哲史の問題提起を引き継いでいる。序論ではその問題系をより明確化した上で、しばしば何らかの過去をめぐって書かれる百間のテキストにおいては、イメージをめぐる過去と現在の錯綜した時間性こそがその問題系と批評的に切り結ぶ鍵になっていること、またそれゆえ百間のテキストが歴史的に位置付けにくい理由の一端もそこにあるのではないかといったことを論じている。

第一部では、百間のテキストをめぐる歴史的問題について、まず評価史の検討からアプローチしている。第一章「百間の評価史」のうち第一節「一九二〇年代から敗戦まで」では、百間のテキストが一九三〇年代に評価され始め、関連する映画が公開される三〇年代末に人気の最盛期を迎えるという変遷を示し、また日本郵船との関わりや植民地への訪問など、これも一般にあまり知られていないがテキストに関わる重要な出来事についてまとめるなど、戦前期のテキストをめぐる同時代の歴史的文脈を提示している。

これに対し第二節「一九五〇年代から現在まで——先行研究の検討とともに」の方では、主に一九五〇年代から現在に至る評価史を整理している。具体的な先行研究の検討も行ったが、本論文はそのような読み直しによって、単なる先行研究の整理にとどまらず、第二部とは別の仕方では百間のテキストの核心にせまっている。また、この第二節では、柄谷行人が「近代文学の終り」を見出す一九八〇年代に百間のテキストの再評価が進んだことの意味、そこで百間のテキストの現代性が発見された点について明らかにし、テキストをめぐる歴史性についてより重層的な検討を行っている。

次に第二部、第三部の議論は、先述の丸川の問題提起をふまえながら、より詳細な形で、百間のテキストが国家、歴史、主体といった問題と切り結ぶ様相を論じることに充てられる。第二部では、一九二〇年代の百間のテキストを取り上げ、こうした資本とテクノロジーに媒介され国境を超える「帝國的な広がり」とそこにおける抗争という問題から検討しているが、これを特に映画というメディア・テクノロジーと関わる問題として考察している。

第二章「映画をめぐる歴史的転換と百間作品」ではまず、映画を鍵に一九三〇年代頃からのある歴史的な変移を論じる丹生谷貴志の論考を参照して、第二部の議論が共有する問題系を示している。その変移はオリジナルと複製をめぐる問題と関わり、ひいては主体とイメージの関係性、主体と〈世界〉の表象をめぐる問題と関わるものである。本論文はここに戦前期日本の具体的な文脈を補い、大正期の〈文学〉領域で、映画や分身といったテーマがどのように浮上していたのかを論じている。「冥途」（一九一七）や「映像」（一九二二）といった百間のテキストの考察も行っているが、こうした考察により、これらのテキストと、第三章・第四章で論じるテキストとの相違がどういった点にあるのかを、前もって明確化している。

そして第三章「旅順入城式」における映画と〈帝国〉をめぐる経験——イメージの〈起源〉と抗争」、第四章「大尉殺し」論——テクノロジーのショックと歴史的イメージの構築」では、日露戦争と陸軍大尉殺人事件という明治三〇年代に多くの人間がメディアを介して経験した出来事を反復することが焦点になった二つのテキスト、「旅順入城式」（一九二五）、「大尉殺し」（一九二七）をそれぞれ論じている。二篇では、一度も現前したことのない経験の〈起源〉が遡行的に到来するという問題が、映画をめぐる一九二〇年代の状況を契機として浮上し、抗争が生じている。そこでは〈世界〉はメディア・テクノロジーに媒介された同質的な地平としてではなく、錯時的な時間性に関わるものとして現れている。

二〇年代後半は、主体の経験をめぐる抗争が前景化し、いわばイメージと主体の関係性がそれ以前のテキストとは異なる位相で語られる点で、百間のテキストにおける一つの転換期だと言える。そしてそれはまたこの時期、「百鬼園」を冠したテキストが発表され始め、「随筆」の書き手として人気を博すまでの変化が始まっているという意味でもそうなのである。これらは別々の事柄ではなく、いずれも同様の社会的変動に関わるものではないか。以上のような問題関心の下、第三部ではこれまでであれば「幻想文学」「随筆」と分けて考えられて来たテキストについて、ともに百間のテキストが関わった問題を示すものとして論じている。

第三部の第五章「百間の作風の変化に関する問題——〈文学〉領域をめぐる社会的変動」では、二〇年代後半の百間が位置した状況について改めて整理し、「随筆」なるジャンルとの作家の関わりを、内在的な転回としてではなく、〈文学〉領域をめぐる社会的な変動から考えることの重要性を示している。また、先行研究では、一般的な「随筆」が〈現実〉をありのままに書いたものだとする認識の下、百間のテキストの虚構性を強調することで評価しようとしてきた経緯があるが、本論文はまずはこうした認識を相対化することが、百間のテキストについて考えるためには必須であると論じている。

そして第六章「随筆」の流行と〈文学〉の境界線——『百鬼園随筆』まで」、第七章「随筆」と〈自然〉——一九三〇年代における「随筆」批判と百間評価に関して」では、ほとんど短文ということ以上には共通性が見えない「随筆」なるジャンルについて、主に一九二〇～三〇年代の議論と、そこにおける百間のテキストの評価などを検討している。それにより、「随筆」なるものをめぐる認識の揺らぎと、まさにそのようなカテゴリーの曖昧さこそ百間のテキストが関わった点を浮かび上がらせようとしている。

また、こうした「随筆」なるカテゴリーを不変的なものと見なす認識は、〈現実〉を不変的に現前するものと見なす認識と関連している。〈現実〉とテキストとのほとんど無媒介的な結びつきが想定される「随筆」に対しては、書き手の主体的な関与が弱い点が批判されたが、ここでは主体の介在以前の〈現実〉の現前が前提とされている。これに対し、第七章では、過去の想起という経験に関わる、百間のリアリズム

に関する一種の方法論を取り上げて対置している。本論文はこれを、「随筆」なるジャンルと関わった百間のテキストの関心が、あらかじめ現前する〈現実〉のイメージでも、〈現実〉とは異なる〈虚構〉のイメージでもなく、〈現実〉の認識そのものにおけるズレや揺らぎ、いわばある表象の認識そのものにはらまれているズレから生じて来る固有のイメージに関係していることを示すものではないかと論じている。

第八章「都市と歴史の断片をめぐる」——「東京日記」「鼻」では、〈世界〉の表象や過去の想起といった問題を、より具体的に都市と歴史に関わる三〇年代後半の百間のテキストとともに考察し、随筆として発表されたテキストも取り上げている。三〇年代後半、日本郵船の嘱託となった百間は初めて植民地台湾へと赴くが、それを可能にした、日本の帝国主義的進出、ないし交通や通信のネットワークに媒介された国境を超えた社会空間の広がり、同時に、〈国土〉の時間的・空間的連続性の〈危機〉の回復というトピックを同時代的に浮上させていたと考えられる。本論文は「東京日記」（一九三八）や「鼻」（同年）といったテキストの、〈帝都〉において過去の断片的なイメージが脈絡なく到来し、異質なまま対峙するといった様相に、リニアな連続性で繋がった一元的な時空間の表象とも、歴史の排除された神話的な時空間の表象とも異なるあり方があると考え、その可能性を考察している。

第九章「柳撿校の小閑」における盲目と亡霊の時間性」では、盲人の一人称という枠組みを持つ「柳撿校の小閑」（一九四〇）を、現在においては知覚できないように思われる、関東大震災以前の過去や死者といった問題に関わっているものとして考察している。本論文は過去、また一人の女性の不在が、現在・現前を前提とする時間性とは異なる、錯時的な時間性における亡霊的な現れとして浮上してくる点に注目している。また、こうした錯時的な時間性が、盲人の一人称という枠組みと文字の視覚性との齟齬としても浮上している点にも注目し、宮城道雄の「随筆」をめぐる評価もふまえて、文字と声をめぐるテキストの問題を論じている。

第一〇章「サラサーテの盤」における亡霊の現前をめぐる——声・意味・メディア」では、「サラサーテの盤」（一九四八）を取り上げ、やはり亡霊的な現れと錯時的な時間性が問題になっている点を論じている。テキストでは伝言を介した〈声〉の現れや、明確に意味と結びつかない〈声〉の現れがあり、それが今ここに露わには現れていないもの、すなわち亡霊的なものを至るところで発生させているが、最も鮮烈なのは蓄音機を介した〈声〉の聴取が生じる結末である。本論文ではこれをラジオ放送をめぐる戦時下、また敗戦時における〈声〉の聴取の様相から考察し、テキストが〈声〉の錯時性と偶発的な一回性こそ関わっている点を評価しようとしている。

結論では、本論文の各章を整理し、成果と課題を述べている。本論文は、「旅順入城式」以降の百間のテキストについて、資本とメディア・テクノロジーに媒介された社会空間の広がり、〈国土〉の時空間をめぐる問題や、それと関わるイメージと主体の様相をめぐる問題からその抗争の様相を論じている。メディア・テクノロジーが均質な時空間の表象と結びつくというより、その不動の〈現在〉という視点そのものを

揺るがし、イメージの認識をめぐる時間的錯綜が前景化してくるといふ百閒のテキストの様相に注目した上で、同時代状況との関係を論じる点に本論文の特徴があることを述べている。また、論じたテキストの数が少ない点や重点的な検討ができなかった問題がある点など本論文の課題に言及し今後の展望を述べている。